ゼロ魔?ラグナロック　　～闇の聖女伝説～

リアルではおぜうタイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロ魔？ラグナロック　～闇の聖女伝説～

【Ｎコード】
Ｎ０４５６Ｕ

【作者名】
リアルではおぜうタイプ

【あらすじ】
――――これは【魔王プリエ】と呼ばれた、一人の少女の物語。
物語は語り継がれゆき、そして伝説となり……
また、新たな物語が語り継がれることになる――――

※この作品はゼロ魔？ラグナロック　～闇の聖母伝説～（一発ネタ）を連載化したものです。ぶっちゃけ作者はゼロ魔をあまり知らないのだが大丈夫か？
Ａ大丈夫じゃない、大問題だ。

というかもうあの一発ネタの部分をプロローグとして扱ってもいいんじゃないかな、という物臭発想により何かいきなり感漂うかもしれないので事前に短編の一発ネタの方を見ておいてください。
（似たような内容のをもう一回書くのって本当に疲れるんだよね…コピペじゃだめだろうし・・・）ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９８２８ｔ／↑短編はこちら。

第一話　使い魔様という仕事

その日、トリステイン魔法学校は騒然としていた。

魔法の才能がないことで有名な【ゼロのルイズ】こと【ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール】が使い魔召喚の際に魔王を召喚したという噂が流れていた。

その場にいなかった、つまり噂を聞いただけの者はそんな馬鹿な。と鼻で笑う程度の信憑性の薄い噂。

しかし、その召喚の場にいた者たちは顔を青ざめていう。

「ゼロのルイズが魔王を召喚した」と。

その当事者であるルイズとその使い魔はどこにいるか、というと。

「うっわ、すっごい豪華……聖女会とは大違い。」

「その聖女会ってのがどこか知らないけど、ここが寮の私の部屋。」

寮で寛いで（？）いた。

ルイズが呼んだ使い魔、魔王の名は【プリエ】。

元人間で悪魔祓いの魔王。不幸な定により人間から魔王へと変貌を遂げた少女である。

魔王の名には似つかわしくない白と紫のローブ（但し脚がほぼ露出している）を身にまとっていが、これは人間時代のものだと彼女はいる。

さて、魔王と呼ばれている彼女だが、膨大な数ある魔界でも知らない者はいないと言っていい。

その武勇伝は有名な物から知るものしか知らない物まで数多くある。

それほどまでに有名な魔王なのだ。

その武勇伝の内もっとも有名な物を一つ挙げよう。
魔王と一口に言っても、それは上から下まで幅広い。
訓練された人間が数人いれば倒せるような軟弱な物から人間ではどうあがいても倒すことのできない圧倒的強者まで。
その圧倒的強者の最たるものが、超魔王バール。
魔王の上を行くという意味合いの大魔王という称号があるが、さらにその上を行くという武力のインフレの果てに存在する魔王。それがバールなのだ。
そのバールをプリエはあろうことか幾度となく打倒し、さらには配下にすらしてしまったという。
その際偶然現場に居合わせた魔界テレビのサメさんはこう語る。
『正直、あのときのことは思い出したくないですねー。あの超魔王バールを物ともせずに打倒すあの姿！正直恐怖以外の感情を持てませんでした…』

そんなプリエは超魔王の称号を持っているわけなのだが…
プリエはその名を返上。
未だ一介の魔王を名乗っている。
理由は【そんな大層な名前があったら悪魔が寄り付かないじゃない。】という。つまりは知性の低い悪魔をフルボッコにするためにただの魔王を名乗っている。
何とも魔界的な理由だ。

そのような圧倒的な力を持つプリエだが、見かけはルイズと同じ１６歳の少女。それ故かルイズもそれほどまでに敬遠はしていないようだ。
「で、使い魔になっちゃった私は何をしろって？」

壁に寄りかかって腕を組むプリエ。本人曰く「何かこうすると強者っぽくてかっこいい」。とことん悪魔思考になっているプリエである。

「服を洗濯…はできないでしょうね。絶対破りそうだし。」
「ま、あたしは力仕事とか悪魔退治専門だからね。あとこれでも元シスターだし相談とか受け付けてるから。」
「遠慮しとくわ。使い魔に相談する主とか変だし。それに何か頭弱そうだし。」
「……言い返せない……」

プリエは口では勝てないと判断したようで、黙りだした。
数百年生きた魔王がたかが１６歳の少女に口で勝てないのも不思議ではあるが、それが悪魔クオリティー。魔界は言語力より暴力を必要としている。比較的。

「まぁとりあえず、魔王を使い魔にしたってことで私の威厳その他諸々はあがるでしょうし。私に扱き使われなさい。いいわね？」
「嫌に決まってるでしょ。別に仕えるとかは過去に経験あるしわかるけど、威厳とか正直どうでもいいし。」
「……使い魔の癖に、ご主人様に逆らう気？」
「魔界じゃあ下剋上は日常茶飯事よ。信じれるのは己のみ。」
「ここは魔界じゃないわ、ハルケギニア。それにもうあんたは私の使い魔。魔王でも悪魔でもどっちでもいいから使い魔の分際でご主人様に逆らうことは許さない！以上！」
「うわ～…アルエット並のお堅い頭。ウザっ。」
「なっ！誰がウザいよ！固い頭よ！」

片や超魔王すら打倒する魔王中の魔王。

片や落ちこぼれの少女。
なのにほぼ同レベルの口喧嘩をするというのはどういうことなのだろうか。

「ぬぐぐぐぐぐ……」
「むむむむむむ……」

女三人寄れば姦しいというが、この二人だけで十分姦しい。いや喧しい。

「…もう寝るわ！あんたの寝床はその辺の床！いいわね！」
「じゃあ魔王らしくその辺の部屋襲って寝床にしとくわー」
「や　め　な　さ　い　！」

この時、ルイズのよく通る怒号等々によりさらに悪い（？）噂が広まることになる。
【ルイズの使い魔の魔王は寮の部屋を生徒から奪い取り堂々と使っている】と。
その噂を聞いたルイズは一度プリエを殴る、と決意したとか。

第一話　使い魔様という仕事（後書き）

ルイズが大分丸いのは既にプリエの実力（軽く地面を殴ると深く抉れたクレーターができる程度）がわかっていて優秀（？）っぽいからかもしれません。
しかし、なぜここまで同レベルな言い争いなのか…

次回。キザ野郎（ギーシュだっけ？）フルボッコ。
闇の聖女の名のもとに。
やーきぶたー

第二話　魔王と貴族と二股と（前書き）

まさかのこちらの投稿。どっちも不定期更新になりそうで……。
今回、約一名明らかにおかしいところがありますが
大丈夫だ、問題ない。

いや、だってプリエ関係者でフリーの男ってあの子しかいなかったし……

第二話　魔王と貴族と二股と

ルイズの魔王召喚騒動から一日。
未だ噂の興奮は冷めてはいなかった。

早朝、ルイズの部屋。
ルイズの着替え等はプリエができそうもなかった（確実に破る。粉々にねｂｙルイズ）ため、【仕方なく】その辺にいたメイドにやらせたルイズ。朝の目覚めも最悪だった。

「……はぁ。」

自分の他に誰もいない部屋を見回し、ついため息をついてしまうルイズ。
流石に何も出ずに爆発だけ、よりはマシだったかもしれないが出てきたのは魔王を自称するルイズと同じぐらいの年齢の少女。
そのくせありえないほどの力を持っている、ということもわかってしまったため、正直扱いに困る。というのが今のルイズの使い魔に関する考えだ。

「ちゃんとした使い魔で、着替えもさせてくれるようなののほうがよかったのに。」

そんなことを呟くも契約はどちらかが死ぬまで続く。そしてあのプリエが簡単に死んでくれそうにもない。
ルイズにとって魔王の定義というものは未だ曖昧だがつまりは【悪魔を束ねる王様】という認識だ。
魔王としてはあっているがプリエとしては合っていない。プリエは格好よく言えば孤独な魔王なのだ。身も蓋もないことを言うとプリ

エは強い悪魔を倒すことにしか興味がない。
そして味方にも強い悪魔がいた場合、そちらも纏めてぶちのめすような性格の持ち主のため部下を持つ気すらないのだ。

「……使い魔なら、せめてご主人様の傍にはいなさいよね。」

そう呟きながら一人で着替えを済ませ、扉を開ける。

「あ、おはよ。」

そこにはプリエがいた。

「……何でこんなとこにいるのよ」
「そんなの、ルイズがその辺の床が寝床だっていうからその通りにしただーけーよ。全く、暫くぶりのふかふかベッドで眠れると思ったのに」
「使い魔の分際で学院のベッドを使えるわけがないでしょ？そういうのは貴族のものよ。」
「……何か貴族貴族って、そんなに偉いわけ？貴族って。」
「当然でしょ。貴族なんだから。それより早く行くわよ。」
「…どこに？」
「朝食よ。決まってるでしょ。」

そういい、ルイズはプリエを連れ、廊下を歩いて行く。
その道中でプリエを見た生徒が「あれが噂の魔王か…」とか「主のルイズとは大違いだな。主に体型がが。」とか言っていたが、後者の生徒はルイズによりとび蹴りを食らっていた。
とても魔法学院の生徒のやる攻撃ではない。

大広間。主に朝食等を生徒達がとる場所。
かなり長い机が数台に、椅子が何十脚と並べられ他の生徒達が各々座っていた。

「広っ！？何これっ！？」

この大広間に付いたプリエの第一声がこれだ。

「当然でしょ。生徒はここで食事をするんだもの。」
「こんな建物とか、魔界にもそうないわよ…。いいなー。」
「羨ましがってる場合じゃないでしょうが、早くついてらっしゃい。」
「はーい、ミス・ヴァリエール様ー。」

机の中ほどの席まで移動すると、突然ルイズが止まる。
顎で椅子を差している辺りプリエに「椅子を引け」と言いたいのだろうがそんなジェスチャーはプリエには勿論通用しない。
魔界生活を送るうちに思考が微妙に単純化しているのだ。
それでいいのだろうか。魔王として。

「おおおお～……すっごいうまそう…」
「…早く椅子を引きなさいよ。気が利かないわね」
「えー？はいはーい。」

痺れを切らしたルイズが口で指示してやっと嫌々ながら椅子を引くプリエ。
その光景を見て「使い魔に思いっきり反抗されてるじゃない。」とか「ゼロのルイズじゃあ魔王は荷が重いんだろ」など陰口もたたかれているが、ルイズは一切気にする様子はなく、プリエが引いた椅

子に座る。

「ああそうそう。あんたみたいな使い魔には椅子は無くて、そこの床に座って…」

「（がつがつ）ん？（むしゃむしゃ）何？（ばりばり）これすっごい美味いわよー。」

ルイズの耳に聞こえた不穏な音。そう、言わば何かを食べているような。

ギリギリギリと壊れた人形のように顔を左側に向けるルイズ。

そこにはルイズの隣に座り置かれた食事を何の躊躇もなく食べつくしているプリエがいた。

「あ…あんた、何してんのよ……」

「ご飯食ってるのよ。魔王…いや姿は人間だけど、腹が減っちゃあどうしようもないしね。強いて言えばうどんがほしいわねー。ないの？」

「ないわよ！」

ルイズの怒号も気にせず食べ続けるプリエ。

一刻も早く止めないと（手遅れだが）ルイズの評判が底辺を突き抜けかねない。

「てか、何でそんなとこに座ってんの！そこは貴族が座る場所！あんたみたいな使い魔が座っていいところじゃないんだからね！」

「じゃあ、貴族の定義って何」

「は、はぁ？」

突然プリエの声色が変わる。先ほどまで食事に幸せそうな声はどこ

に行ったか、本当に悪魔のようなものが感じられるような低い声になっていた。

「だから貴族の定義って何。お金をたくさん持っていること？」
「そ、そんなの決まってるでしょ！？魔法が使えることよ！あんたみたいな奴が「メガウインド」……え、きゃあああああ！！？」

プリエの一言、メガウインドの言葉と同時に突然風が吹き荒れる。そこまで強い風ではなかったからか食器はカタカタ揺れて音を立てるのみだった。

「…これで私は貴族って証明できたわけだけど」
「そ、そんなわけないでしょ！？偶然よ偶然！」
「まぁ確かにそこまで得意ってわけじゃあないわ。あたし肉弾戦専門だし。じゃ、ごちそうさま。」
「え、ちょ、待ちなさいよプリエ！！」

ルイズが抗議するもどこ吹く風。
プリエは席の前にあったものを根こそぎ食い尽くすと、すたすたと大広間を出て行った。

「……あ～！もう！何よあいつ！」

ルイズが地団駄を踏み掛けるも、周りの目を考えて思いとどまる。
若干手遅れではあるが。
そんなルイズを傍から観察するのは【微熱のキュルケ】ことキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。そして【雪風のタバサ】ことタバサ。

「ルイズが召喚した自称魔王…結構いい女よね。」

「……同性趣味」
「そういうわけじゃあないわよ。ただ、ルイズとは違っていいライバルになりそう、って感じで…。」
「…悪趣味」
「あらひどい。」

中庭に出たプリエ。ふと周りを見渡すと、犬なり猫なり土竜なり動物がそれぞれ寛いでいた。

「あれと同Ｌｖに見られるってのはものすごく気に食わないんだけどね、マジで。」

使い魔としての戦闘力での格はどう考えてもプリエの方が上だが、どちらも使い魔と一括りにされてしまうのがハルケニギア。知っている人間からすれば残念ながら同じ使い魔なのである。
魔王をほぼ強制とはいえ数百年経験したプリエからすれば屈辱というレベルではないだろう。

「まぁ、考えないほうが無難よね……」

そんなこんなで中庭で寛いで（本能的には同Ｌｖじゃないだろうか、この魔王も）いると、続々と生徒達が出てくる。食事の時間が終わったようだ。

「となると、ルイズもそのうち来るんでしょうし…あーかったる。これならザコゾンビでも倒す方がまだ体動かせてマシよ…」
「使い魔の分際で主といるのがかったるいだなんて、随分と偉くな

ったわね。」
「うげっ！いたんだ…」
いつの間にかプリエの真後ろにいたルイズに思いっきり愚痴を聞かれたプリエ。
完全にルイズはご立腹だ。

「いたわよ。あんた、とんでもないことしてくれたわね」
「人間生きるには食い物が必要でしょー。」
「あんたは人間じゃなくて使い魔でしょうが！」
「…確かに今は人間じゃなくて魔王だけど。腹は減るのよどうしたって。うどんとかないのが残念よねぇ。」
「無いっつってるでしょうが！」

「あらあら。随分と使い魔と仲が悪いのねルイズ。」

プリエとルイズの漫才に入り込んだのはキュルケと、その使い魔、サラマンダー（簡単に言うと火蜥蜴）のフレイム。
フレイムはプリエを見て若干目を泳がせているが。

「…なにそれ。蜥蜴？食える？」
「食えないわよ」
「食べないでちょうだい。私の使い魔だから。サラマンダーのフレイムよ。よろしく。」
「ぎゅろっ」
「…サラマンダー？」

キュルケの紹介を聞き、若干まゆを潜ませるプリエ。ものすごく怪しそうにフレイムを見つめる。

「あたしが知ってるサラマンダーって、もっと人魂っぽい姿してたんだけど…」
「少なくともハルケギニアではサラマンダーはそんな蜥蜴よ。」
「悪魔っぽくはないしねぇ…。」

「まぁそれはともかく。随分と使い魔に反抗的にされてるわねルイズ。使い魔は主には絶対忠実。のはずなんだけど…」
「余計なお世話よ！」
「ゼロのルイズには魔王は荷が重すぎたんじゃないのぉ～？それならまだ、ネズミの方がいいわね。じゃあ御機嫌よう。ほーっほっほっほ！」
「ぎゅろっ！」

高笑いしながら去って行くキュルケとフレイム。
その後ろ姿を見て、プリエとルイズの心は初めて一つになった。

「「何なのあの女～！！！！」」
「プリエ、あんたあいつが嫌な女って一目でわかったみたいね…」
「ああいう高笑いする女にいい奴はいないのよ経験上ね…！」
「……」
「……」

プリエとルイズは熱く握手を交わした。
多分このとき、ルイズは使い魔云々のことは忘れていたのだろう。
こうして、ルイズとプリエの反キュルケ連合は結成したのである。

「チーズケーキうまっ！」
「感謝しなさいよ。使い魔なのに席があるなんてこれ以上名誉なことは…」
「ぷはー…やっぱ何年生きても女の子ってのは甘いもの好きよねぇ……」
「聞きなさいよ！！！」

その後、中庭でお茶（しかしプリエは完全にケーキ目的だが）をしていた二人。
反キュルケ連合の影響はルイズ内では結構大きいようだ。

「あ、あの。追加のケーキ、お持ちしました。」
「あー、そこに置いと……」

プリエがケーキを置いたメイドを一目見た途端一瞬プリエが止まった。
そして一言呟く。

「キュロット……？」
「え、えっと…何か粗相をいたしましたか？」

プリエと似た赤い髪と黒い瞳。それだけで一瞬プリエには視えた。
数百年前に分かれた唯一血の繋がった弟が。

「い、いやぁ、なんでもない！なんでもないわよ！？」
「そ、それならよかったのですが…あの、貴女はご貴族様で？」
「いや、こいつの使い魔。」
「使い魔が主に向かってこいつとか言わない！」
「はーい……」

「…そうだ、プリエ。あんたその給仕の手伝いをしなさい。ここでケーキ食べてるよりは役に立つでしょ。」
「えー……私が「じろっ」…はいはい。わーかりましたよー。」
「え、えっと……」
「つうわけでなんか手伝うことになったわ。よろしく。」
「あ、はい……」

ルイズの気紛れ（？）により給仕手伝いをさせられることになったプリエ。
メイド服はなかったらしく、服は変わってはいないのだが。

「そうだ、私はシエスタといいます。」
「あたしはプリエよ。気軽に【プリエ様】とか呼んで頂戴。」
「あ…はい、プリエさん。では、このケーキを……ギーシュ様の場所に運んでください。」
「ギーシュ……？」
「あ、ええと、大きなモグラを使い魔とされているお方です。すぐに見つかると思いますよ。」
「へーい。いってきますよー。」

再び中庭に出たプリエ。少し見渡すと、巨大な土竜を抱えた男子はすぐに見つかった。
本当に目立つ。

「…この、ヴェルダンデと一晩語り合ったのさ。」
「ああ…一晩中、ねぇ……」

巨大なモグラを抱える男子が【青銅のギーシュ】ことギーシュ・ド・グラモン。それと向かい合う少女が【香水のモンモランシー】ことモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。この二人、そうは見えないが恋人関係である。
どう見てもギーシュが言い寄っているだけである。

「ああ…この知的な瞳、そして官能的な触り心地…！まさに僕の使い魔なるべくしたなったようなもの…！」
「…どうでもいいけど、私と会う時はそれ、埋めておいてよ。」

「はーいケーキ一つお待ちー」

そこにプリエが机にケーキの乗った皿を置く。耳の部分がなくなっているようだが気のせいである。

「ああ、お茶のお代りも頼むよ」
「メンドイからパス。」

そう言い残し、プリエはさっさとギーシュから離れる。
あまりに自然な受け答えだったからかギーシュは断られたことに気づいていないようだ。

「そういえば、最近一年生とも付き合っているらしいじゃない？どういうこと？」
「そ、そんなことあるわけがないじゃないかモンモランシー。君への思いに、裏表なんてないさ。」
「ふ～ん……」

「はーいお客様一名お待ちー」

「ああ……え？」

再度登場したプリエは、その手にお茶は持ってはおらず、その代り横には茶色のマントを羽織る女子がいた。

「ケ、ケティ！？」

「ギーシュ様…！！」

ケティと呼ばれた少女はギーシュに駆け寄り、手に持つバスケットを付きだす。

「探しておりましたギーシュ様！あの、これ夕べに話した手作りのスフレ。今日のお茶会にと思いまして。」

「ああ…、それはそれは……」

「夕べぇ…？」

「ああいや、その、それはだね…？」

「よかったじゃない。ギーシュ様、夕べ話した時から楽しみにしてたとか言ってたわよね？」

二人に挟まれて困惑するギーシュをニヤツきながら見つめるプリエは、さらに場を荒らす爆弾発言を投下した。

「き、君は…！」

「そのケティって子から聞いたのよ。それだけ。」

「ギーシュどういうこと！？」

「き、君！先ほどから……」

やっとプリエの方を見たギーシュは、プリエを見ると同時に言葉を失う。

「先ほどから？私は給仕らしく【お客様】の【ご要望】にお答えしただけなんだけど。」
「ぬぐ、う……！」

「なんだなんだ？」
「ギーシュが魔王と何かやりあってるらしいぞ？」

プリエやギーシュ達の周りにはいつしか人が集まり、完全に見ものになっていた。

「まさか、あんた二股かけてたりしたんじゃないのぉ？」
「二股！？」
「あんた、やっぱりこの一年に手出してたんじゃないの！キィィィィ！！！」
「あああああ、お願いだよ香水のモンモランシー。その薔薇のような顔を怒りで歪ませないでくれたまえ…！そう、これは何かの間違いで…」
「ひどいですわギーシュ様！私だけと仰ってましたのに！」
「と、とにかく、二人とも、落ち着いて……！」

必死に弁解するも時既に遅し。完全に自滅したギーシュは二人を止められるわけもなく――――

「「嘘吐き！！！！」」

二人から左右同時のビンタを両頬に見事に食らった。完全に自業自得である。

「「「「「あはははははは！！！」」」」」

二人が去り、周りからは笑いが上がった。

「振られたなギーシュ。ま、自業自得だけどさ。」

ギーシュはプリエの方を向くと、突然にらみだした。
プリエにとっては威圧感は皆無だが。

「どうやら、君は貴族に対する礼を知らないようだ…」
「残念だけど、私はどっかの王国の王女様と親友同士だったからね。
貴族がどれほど偉いのかそこまで考えたことないのよ。」
「よかろう……君は魔王と名乗っているが、その実力が本物か試させてもらうぞ…決闘だ！！！」

ギーシュは愛用の薔薇型の杖をプリエに向け、高らかに宣言した。

「あんたみたいな弱そうなのと決闘してもつまらないからパス。」
「君は魔王とは名乗ってはいるが、ゼロのルイズの使い魔…その使い魔の君が、二人のレディを泣かしたのだ！」
「聞きなさいよ人の話。つか泣いてなかったじゃない。むしろマジギレしてた。」

さらに周りの笑い声が増える。
この状態では完全にギーシュに非があるが貴族にはそんなものは通じない。ある意味悪魔レベルの横暴さである。

「くっ…覚悟はいいな！ヴェストリの広場で待っている！」

そう古代レベルの果たし文を言い残し、ギーシュは去って行った。

「一生待ってなさい。」
が、プリエは一切気にしていなかった。
「……」
突然、仏頂面のルイズが現れたと思ったらプリエの腕をつかみ、ギーシュの去った方向に歩きだした。

「え、ちょちょちょ！何よルイズ！？」
「うるさい！あんた、何したのかわかってんの！？」
「喧嘩売られただけで何もしてないんだけど…てかどこに行くの」
「ギーシュに謝りに行くの。今ならまだ、許してもらえるかもしれないわ。」
「謝りに…？何でよ。あんなザコに謝る必要なんてあるの？」
「バッ…何言ってるのよ！？相手はメイジよ！？メイジに平民が勝てるわけ」
「じゃあ大丈夫ね。私はメイジでも平民でもない。ラ・ピュセルの悪魔祓い、シスター・プリエよ。」
「そういう問題じゃあ…！」

「おーいそこの！ギーシュの言ってたヴェなんとかの広場ってどっちー？」
「ああ、あっちあっち。」
「マリコルヌ！」
プリエはマリコルヌと呼ばれた男子の指す方向を見ると、一呼吸置いて「じゃあ、行きますか！」と大きく声を出し走り出した。

「ちょ、ちょっと！」
「いやー、これは見ものだねぇ！噂の魔王対ギーシュ！見に行かなきゃ！」

他の生徒もぞろぞろとヴェストリの広場に向かい、いつの間にかルイズ一人が取り残される。

「あー、もう！使い魔の癖に勝手なことばっかりするんだからー！！！！」

怒りをあらわにしながらもルイズもヴェストリの広場に向かった。

第二話　魔王と貴族と二股と（後書き）

ちなみにプリエのレベルは９９９９。でもＩＮＴは低い。
具体的には真・バールよりちょっと強い程度。でもＩＮＴは低い。
タイマンならバール・ディスバールは雑魚。でもＩＮＴは低い。
真・バールでいい勝負でプリエ勝利、というレベル。でもＩＮＴは低い。

装備はフェイタリシオン（ディスガイア２仕様）、ゴッドハンド、超合金ロボスーツ、超能力増幅装置と完全にガチ装備。でもＩＮＴは低い。

完全なチートですがＩＮＴはたったの１０万程度。（９９９９Ｌｖの数値じゃねぇ）
（比較対象、スクウェアメイジのＩＮＴ：大体１００）
プリエの詳しいステータスは後々。ラ・ピュセルやってる人しかわからないことになりそうですけど。

魔王プリエのステータス（前書き）

魔王プリエのステータスです。
作者はまだ最高Ｌｖが５００ぐらいなので数値はラ・ピュセル？ラグナロックの真バール（Ｌｖ９９９９）の数値を参考にしてます。
ＳＰ、ＨＩＴ、ＳＰＤはゼロ魔世界ではあまり参考にならないので比較対象無、
ＲＥＳは何か魔法を防ぐようなものがないので比較対象無。

装備があからさまにガチなのはご愛嬌。ラ・ピュセルには存在しないフェリシタシオンがあるのもご愛嬌。
とくしゅは一撃必殺・破壊脚でたいていは一撃。魔王モードに出番は来るのだろうか…？（主に周りへの衝撃的な意味で）

※頂いた指摘により大幅数値修正（ゼロ魔側のみ）。
バールとかを見ていると酷く感覚が麻痺しているような気がして……
ちょっとディスガイア２をはじめからやってきます…

魔王プリエのステータス

大魔王
プリエ
Ｌｖ９９９９

ＨＰ：約２０００万　（ギーシュのゴーレムが大体５００）
ＳＰ：約３２０万

ＡＴＫ：約３０００万　（破壊の杖が大体２００）
ＤＥＦ：約２０００万　（ギーシュのゴーレムが大体８０）
ＨＩＴ：約２００万
ＩＮＴ：約１０万　（スクウェアメイジが大体１００。Ｌｖ９９９９ではどう考えてもこの数値（１０万）は出ない）
ＳＰＤ：約１９０万
ＲＥＳ：約３００万

装備
フェリシタシオン　（プリエ愛用のバトン。叩き付けても炎が出るほど早く振っても壊れないすぐれもの。）
ゴッドハンド　（龍をも殺す拳らしい。タバサ逃げて。）
超合金ロボスーツ　（超合金でできたロボのようなスーツ。本当に超合金製。）
超能力増幅装置　（超能力を増やします。超能力じゃなくても増やします。とにかく能力を増やします。）

特技
一撃必殺・破壊脚：気合を込めた蹴りで相手を粉砕。基本的に急所（下腹部）を狙っているので致命傷。

悪霊退散・爆裂砕：跳び蹴りで相手を蹴り上げ、落ちてきたところを一撃必殺・破壊脚で蹴り飛ばす技。プリエの脚力だとこの時点で人間にやっていい技じゃない。

妖魔粉砕・竜王撃：相手を蹴り上げた後、三連続で空中回し蹴りを食らわせる技。（公式では大地を揺るがす二段蹴りってあるけど攻撃回数は４回だったりする）

魔王滅却・昇蹴撃：バトンを高く上空に投げ捨て、さらに相手を蹴り上げ続けて同じ高度に達すると同時にバトンに蹴り当てる。謎の高速回転により着地したプリエに向かって相手が弾き出されるとプリエが強烈なアッパーでとどめを差す。かの超魔王バールもこの技で沈めたとか。

聖バトン技・大旋風：聖なるバトンを増やして超速回転させ、相手にぶつける。増やせるのは８本まで。

聖バトン技・華斬梅：バトンをフルスイングした際に出る火花（規模はもはや火柱）で相手を三回攻撃する。何故かバトンは壊れない

聖バトン技・改心撃：相手の顔面に跳び蹴りを食らわせてひるませてからさらにバトンで叩き付けダメージを与え、最後にバトンをフルスイングして吹き飛ばす。

経絡秘孔：アドリヴで人体の秘孔を突き、身体の異常を治す技。アドリブでやってる割には成功率が高い。（本来は状態異常を治す【奇跡】。エスポワールとの違い？知らんがな）

魔法

全属性のメガまで＋ブレイブハートを使用可能。しかしブレイブハート以外使う気はあまりないらしい。

元人間で元悪魔祓いの魔王。ルイズに召喚された際に人間の姿に戻ったが、魔王としての実力は健在。
人間のころより魔王に染まったからか横暴さが増している。そして微妙に感覚で動くことがさらに多くなった。
超魔王バールを配下に（プリエは断るついでに殴り倒したらしい）するほどの実力を持つ有名な魔王。
魔王になった切っ掛けは最初に魔王と呼ばれた際の弟キュロットの冗談、【でも、姉さんには光の聖女より魔王の方が似合ってる気もするけど。】
そして光の心を徐々になくし、魔王となって行った。
現在は明るく人間時代のような印象だが、気を抜くと無表情になっている。
また、真に魔王となってからバールを倒すまでの記憶が曖昧。
その間にエトナやアデル＆ロザリンド、魔立邪悪学園一向などと戦った。
シエスタに一瞬弟の幻影を見たらしいが…？

魔王プリエのステータス（後書き）

ラグナロックプリエの通常運転さとディスガイアプリエの恐ろしさを混ぜようとした結果がこれだよ！

つまり……

Ω＜魔王プリエは実は二重人格だったんだよ！！！

な、なんだってー！？＞Ω　ΩΩ

…はい、すいませんでした。

次回、ギーシュフルボッコ。

魔王プリエの名のもとに。

やーきぶたー

第三話　青銅のギーシュ（前書き）

ギーシュフルボッコの回。
ギーシュに勝ち目は最初から…ないよねぇ。
今回出るプリエのとくしゅは…思いっきり叫んでるからわかりやすいはず。

第三話　青銅のギーシュ

「諸君、決闘だ！！！」

薔薇型の杖を掲げ、高らかに宣言するギーシュ。
その周りの生徒達もだいぶ興奮気味だ。

「ただじっとしてるよかマシだけど、こんなザコと戦うことになるってのもあまり変わらないよね…」

だがプリエは逆にテンションは底辺のようだ。
好き嫌いがとてもはっきりしているプリエの場合、ザコはだいぶ嫌いな部類に入る。
そのため見るからに面倒臭そうにしている。実質プリエは面倒くさいと感じている。

「逃げずに来たことは褒めてあげよう、魔王。今、この一時だけ、このギーシュは君を女性とは見ない。魔王としてみようじゃないか！」

「正直どっちでもいいからさー、やるならさっさとしてくれない？ザコ相手にするのって疲れるだけで何の得にもなりゃしないし…あ、肩慣らしにはなるか。」

「ふっ…自信はあるようだが。この「待って！」……む？」

生徒達の輪の中、ギーシュの許にルイズが駆け込む。
走ってきたからか若干息が切れているようだ。

「はぁ、はぁ…ギーシュいい加減にして！決闘は禁止されているで

しょう！？」
「確かに貴族同士の決闘は禁じられている…しかし彼女は貴族ではない。決闘はしても良い。」
「それは！今まで例がなかったからで…」
「ミス・ヴァリエール。既に決闘は始まっているのだ。口出しは無用！」

ギーシュが杖を振ると、薔薇の花弁の一枚が地面に落ちる。
その花弁が光りだすと、地面から女騎士のようなゴーレム、【ワルキューレ】が現れた。

「僕の名は青銅のギーシュ。故に青銅のゴーレム、ワルキューレがお相手し――――」

ト……ガシャアアアン！

ギーシュが名乗り終える直前、ワルキューレの上半身は消し飛び、破片が周りに飛び散る。
一瞬の出来事にギーシュも周りの生徒達も反応できていない。

「次。」

ワルキューレが【あった】ところに拳を突きだしていたプリエが呟く。
これで何があったかわからない人はいないだろう。
プリエは拳で小突くだけでワルキューレの上半身を粉砕したのだ。

「な……馬鹿な…！？くっ！」

ギーシュがさらに杖を振ると、数枚の花弁が落ち、それぞれからワ

ルキューレが現れる。

「不意打ちはもう効かんぞ！さぁ、尋常に勝負だ！」

「御託はいいからさっさとかかってきなさいよ…ったく」

ワルキューレたちが槍を構え、プリエに向かって突き進む。

そのまま槍がプリエを貫く――――訳もなく。

プリエの胴体に当たるも刺さりはせず、服に小さい穴が空くだけだった。

「魔王を相手にすんのなら――――」

ワルキューレの攻撃は一切ないように（実際一切効いていない）プリエはバトンを一本取り出す。

「これの１００万倍は強い奴呼んできなさい！大旋風！」

プリエはバトンを高速回転させて投げる。

すると高速回転したバトンはプリエの周囲を回転ながら回りワルキューレたちを両断した。

魔王に叩き付けようが何しようが壊れないほどのバトンが高速回転すれば、それは既に一種の斬撃にすらなる。

といっても、両断面は荒いが。

「もしかして、これ呼ぶのが限界、ってわけじゃあないでしょうね？」

手に戻ったバトンをくるくる回しながらギーシュに言い放つプリエ。

その言葉に宿るのは【退屈】と【怒り】。

こんな弱いのとしか戦えないのか、という退屈。

こんな弱いのに自分に挑んできたのか。という怒り。

その二つが合わさり、魔王のような威圧感を生んだ。実際魔王であるが。

「馬鹿な…ワルキューレが、こんな…！」

自らのゴーレムが目前の相手に一切歯が立たないことを理解したか、戦意を喪失したかのように尻餅をつくギーシュ。

それは敗北宣言と同じことだった。

それと同時に、周りから歓声があがった。

「さーて。決闘は此処までらしいし、こっからはお仕置きの時間よ。」

ぴた、と歓声が止まる。

決闘は終わった。だが今あの魔王はなんといった？

青銅のワルキューレをいとも簡単に蹴散らす魔王のお仕置きとは？

周りからの歓声は恐怖やギーシュに対する哀れみに変わって行った。

今のプリエの表情は、悪鬼羅刹にも勝るほどの怒りのオーラを纏っていた。

事実魔王は悪鬼羅刹よりは格段に上だろうから間違ってはいないだろう。

「乙女心を踏みにじる奴は……」

「ま、ままま待て！僕の負けだ！彼女らにも謝る！だから、いいだろう！？」

「私に蹴られて地獄に落ちろオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

座り込んだギーシュに撃ちこまれたのは抉るようなボディブロー。

その衝撃により吹き飛ばされたギーシュは近くの壁に激突。一瞬にして気を失った。

殺さない程度（超大幅）に手加減しただけ、まだ優しい部類である。蹴ってはいないが、別にそこは気にする点ではない。

「プリエ！」

「あ、ルイズ。ね、ザコかったでしょ？」

「そういう問題じゃないでしょ！貴族に勝負を挑むってことがどれほど危険か、わかってないでしょ！？」

「貴族とかそういうのがあんなザコばかりなら危険なんて言葉はいらないと思うけどー。」

「そういう問題じゃあ…もういいわ。言っても聞かなそうだし。」

「魔王を配下にできるのなんて大魔王以上じゃないと無理よ、到底。」

「あー、もうわかったわよ！とりあえず、帰るわよ！」

「はーい。」

気絶して囲まれるギーシュを余所にルイズとプリエは寮に帰って行った。

そして後日、ギーシュを圧倒したとしてさらにプリエの噂は増えることになり、ルイズの苦労も積るばかりだった。

～魔界ニュース～

「どうも、こんにちは。ニュースの時間です。魔界警察の調べによりますと、本日未明、超魔王バールを倒したと言われる魔王プリエが魔界ディドレイトで発見されたことを最後に行方不明となったことがわかりました。」

「……」
「ディドレイトと言えば、最近プリエに制圧されたという魔界ですが、警察も調べるのが面倒なので殺人事件と考えましたが、超魔王クラスのプリエを誰かが暗殺するということは考えにくいため何者かに召喚されたと断定し、捜査を打ち切りました。」
「……」
「プリエと言えば、人間の身で魔王を倒し魔王の名を受け、さらに２０の魔王を倒し大魔王と称され、果てには超魔王のバールすら倒してしまったという伝説があり、その伝説も５００年ぐらい前の出来事ですが今も各魔界で大人気です。某ダークヒーローとは月とスッポンの違いですね。」
「……」
「もし、魔王プリエの所在地を知る方は以下の魔界テレホンに情報を願います。もしその情報が的中すれば、プレネールさんから素敵なプレゼントが一名に当たるかもしれません。」
「……」
「現在超魔王に認定されているプリエがいなくなれば、ぶっちゃけ魔界テレビの流すネタが減りかねませんので、皆様のご協力をお願いいたします。では、本日の特集です。本日の特集は、【ファッション】。」
「……」
「今現在、魔界のファッション業界は二分されているともいえます。まずは――――」

第三話　青銅のギーシュ（後書き）

魔界テレビ（主にニュース）を延々と見ていたい、と偶に思ったりします。
ということで、ギーシュフルボッコ&魔界テレビ。
これから毎回最後に魔界テレビをおまけとしてつけようと思います。
あの真面目に馬鹿をやる魔界テレビは本当に毎日見たい。流す内容適当なんだろうけど。

それとプリエに関してですが、例えＬｖ９９９９でもラ・ピュセル本編でよくオマールを蹴ったりクロワを蹴ったり誘拐犯っぽいのを蹴ったりしてるので実は手加減は得意なんじゃないかと思ってます。
でも多分ギーシュは全身複雑骨折ぐらいしてるかもしれない。
南無。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0456u/

ゼロ魔?ラグナロック　　～闇の聖女伝説～

2011年6月16日02時36分発行